

S-face

SFC makes the future through researches

実務と学会を横断し 地球システムを変革

蟹江 憲史

VOL.

015

/100

2016.Oct 発行
和の色 香織結



「超学際」の手法で、地球の未来を守る

21世紀に入り、地球環境をめぐる問題は、新たな局面を迎えています。

「環境や資源の健全な利活用」を前提条件として考慮しなければ、開発を進めることができない時代に入っています。

こうした現状を踏まえ、持続可能な地球環境について研究する国際共同プロジェクト「フューチャー・アース」が始動しました。

蟹江憲史教授も運営に携わるこのプロジェクト、どのように展開していくのでしょうか。

持続可能な開発目標と地球システムガバナンス

私の研究テーマは「地球システムガバナンス」です。地球温暖化対策の短・中・長期的国際制度枠組および地球温暖化政策を中心に研究してきましたが、近年は特に、サステナビリティのガバナンスに関する研究が柱となっています。

そのなかでも主要プロジェクトのひとつが、環境省環境研究総合推進費の支援で進められてきた「持続可能な開発目標とガバナンスに関する総合的研究(POST2015)」で、私がプロジェクトリーダーを務めました。

この戦略研究プロジェクトは、国内外から70名程の研究者に参加してもらい、予算は年間約2億円規模の3年間のプロジェクトでした。短期的には「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」の設定へ向けた国際論議に貢献すること、長期的には人類が持続可能な社会構築に向けて行動を変化させる政策や仕組みを提案しました。

このプロジェクトは2015年度で終了しましたが、その後も持続可能な開発目標(SDGs)の実施や評価のあり方など、SDGsに関する研究は継続しています。中でも、科学と政策の効果的なインターフェイスのあり方とはどういうものか、というテーマに、学術的にも実務的にも関心を持っています。「フューチャー・アース(Future Earth)」という国際学術研究プログラムはこれを実現するひとつの推進力になると考えており、SDGsに関する「知と行動のネットワーク(Knowledge Action Network)」を主導する役割を担っています。

学術と社会を越境する“超学際”という概念

フューチャー・アースは、2012年の「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」において、国際科学会議(ICSU)を中心に提唱されました。地球環境研究に関する既存の国際プログラムを統合するとともに、学術コミュニ

ティやファンディングエージェンシー(※)、国際機関をはじめとするステークホルダー(利害関係者)と協働して、「持続可能な地球環境」のための研究の総合的推進を目指す研究イニシアティブです。

フューチャー・アースの大きな特徴は、自然科学、社会科学、工学、人文学など学術分野の垣根をこえた学際的研究(Interdisciplinarity)の重要性だけでなく、学術と社会の間の垣根をこえる“超学際(Trans-disciplinarity)”がうたわれている点です。

これはフューチャー・アースの活動に、学術の専門家だけでなく、社会のさまざまなステークホルダーが参加し、専門家とステークホルダーが協働して「研究活動の設計(Co-design)」「研究知見の創出(Co-production)」「研究結果の応用、実装(Co-delivery)」を行おうという概念で、従来からある、研究者が象牙の塔で研究をしその結果を社会で使うという一方方向のプロセスとはまったく異なる、双方向のアプローチをとる点が特徴です。ステークホルダーグループとして、①学術研究、②科学と政策のインターフェイス、③研究助成機関、④各政府機関、⑤開発機関、⑥ビジネス・産業界、⑦市民社会、⑧メディアの8つが特定されています。

実は、このアプローチはSFC(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)が25年前から進めてきたものです。私としては、25年経って世の中がSFCについてきた、という感覚で眺めています。逆に言えば、教員としてSFCに戻った今、「未来からの留学生」としてSFCで学んだことが、25年後の社会に本当にあらわれてきた」という感動を同じように味わってもらうためには何が出来るとかということを考えなければいけないと思っています。

※研究資金を配分する機関

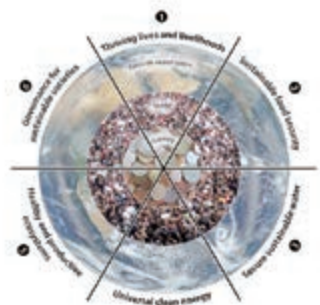
政策現場で得た知見を大学に還元したい

2015年、国連総会で採択された「持続可能

な開発のための2030アジェンダ」のスローガンは「Transforming our world(世界を変革しよう)」です。地球システム、地球のガバナンスメカニズムが抱えている危機を乗り越えていくためには、いまが最後の変革の時だと思います。人類の生き方、考え方を変えなくては手遅れになってしまう問題が山のようにあります。50年経てば人々の考え方が変わるかもしれませんが、それでは手遅れです。このような問題を「ガバナンス」という視点で解決していこうというのが、私の目指すところです。

今後は、短期的には「持続可能な開発」について、科学と政策の効果的インターフェイスを構築する仕事を、長期的には実務と学界を行き来するような仕事をしたいと思っています。

私はSFCの1期生であり、学生時代から「いつかは国連の仕事に携わってみたい」という目標を持ち続けてきました。今も国連大学等で国連の仕事に携わらせてもらっていますが、今後はさらに深く政策実務を行い、そこで経験したことを大学に還元するような仕事をしたい。SFCには、阿川尚之名誉教授や竹中平蔵名誉教授のように、政策実務の分野で確かな実績を残し、そこで得た知見を大学に還元された偉大な先輩方がおられます。これこそがまさに「超学際(Trans-disciplinarity)」であり、設立以来のSFCの理念の根幹をなしていると思います。今後の仕事の中で自分自身がTrans-disciplinarityを体現するとともに、Trans-disciplinarityそのものを研究対象としていきたいと考えています。



21世紀の持続可能な開発の概念図

Sustainable Development Goals

持続可能な開発目標



持続可能な開発目標の実施や評価のあり方など、SDGsに関する研究に取り組んでいる。とりわけ、「科学と政策の効果的なインターフェイスのあり方とはどういうものか」というテーマに関心を抱いている。

Hakone Ekiden

箱根駅伝



SFCに在学時は体育会競走部に所属。自身が4年次の1994年に箱根駅伝へ出場して以降、同部は大会から遠ざかっている。最近では「2020年までに箱根出場」を目標に掲げ、自身のもうひとつのプロジェクトとして競走部の箱根復活に尽力している。



Profile

蟹江 憲史

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、国際連合大学サステナビリティ高等研究所シニアリサーチフェロー。北九州市立大学法学部助教授、東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授を経て2015年より現職。専門は国際関係論、地球システムガバナンス。博士(政策・メディア)。

Future Earth

フューチャー・アース



地球規模の諸問題を解決し、持続可能な社会の実現を目指すための国際研究プログラム。蟹江教授は日本事務局の運営に携わっており、自身の研究はフューチャー・アースの根幹をなすテーマであるため、両者の目指す方向性を合わせる活動に取り組んでいる。



詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画も
ご覧いただけます

S-face

検索



慶應義塾大学SFC研究所

慶應義塾大学 湘南藤沢事務局 学術研究支援担当

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322

Tel: 0466-49-3436 (ダイヤルイン)

E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp